

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2016年 夏号

第7巻第2号 (通算19号)

2016年7月25日発行

2016年度全国大会とAIEQ

立花 英裕 (早稲田大学)

7月上旬、梅雨が明けていないのに蒸し暑い日が続いている。このNLが会員諸氏のお手許に届く頃はどんな猛暑になっていることだろう。毎年、夏が近づくとAJEQ全国大会の準備で慌ただしくなる。今年の大会は、10月8日(土)に明治大学のリバティータワーでの開催、詳細はまだ固まっていないが、企画の柱はフェミニズムが予定されている。シンポジウム形式によってケベック・フェミニズムが多角的に論じられるはずである。

もう一つの柱は、招聘講演者キム・チュイ (Kim Thúy) さん、1968年にサイゴンで生まれ、いわゆるボート・ピープルとしてケベックに渡った後に初々しく飛び立った小説家だ。最初の作品『小川』(彩流社、2012年)は、山出裕子会員によって翻訳されている。他にも、*À toi, Mãn, Vi*などの作品があり、*Écriture migrante*の代表的な作家の一人である。

キム・チュイさんの来日を可能にしてくれたのは、AIEQ (Association internationale des études québécoises)。この機会にAIEQについても触れておこう。昨年来、AJEQとAIEQの関係が急速に深まっている。

事の発端は、クイヤール州政府による文化予算の大幅な削減だった。まもなくAIEQ廃止の噂が立った。2015年の年初のことだが、私たちAJEQの財政的将来に暗雲が立ち込めたのである。しかし、幸いにも、署名運動の効果も手伝って、AIEQはすんでのところで廃止を免れた。もっとも予算削減と組織改編は避けられなかった。それにともない、AJEQの補助金申請は窓口が一つとなり、すべてAIEQに対して行うことになった。

しかし、悪いことばかりではない。同年10月に持たれたテレビ会議による交渉の中で、AIEQがAJEQの活動をきわめて高く評価していることが伝わってきた。これも、

●本号の内容●

巻頭言 (立花英裕) …1 ケベック滞在点描 (伊達聖伸) …2

とあるケベック文学の諸相 (佐々木菜緒) …4 リレー連載「ケベックと私」第2回…6

偏に AJEQ 会員諸氏の熱心な活動のお蔭である。小倉和子会長の尽力が大きく貢献していることは言うまでもない。個々の案件については、今年に入って協議され、小畑ケベック研究奨励賞は AJEQ と AIEQ の共催という形で存続が決まった。AIEQ は驚くほど積極的で、本年度の受賞者、関未玲会員と松沼美穂会員のプロフィールを Bulletin (édition du 17 juin 2016) に掲載してくれた。昨年マカンドルー教授招聘についても、AJEQ によって作成された報告文を使わせてほしいという依頼が届き、2015 年度の AIEQ 年次報告書に掲載されている。招聘講演者についても、AIEQ から好意的な感触が伝えられており、当面は毎年確保できそうである。AIEQ との密な関係は、私たち AJEQ にとって財政面のみならず、国際的な交流の中でも重要になっていくにちがいない。

話を AJEQ 大会に戻すと、キム・チュイさんについては、小倉会長自らが申請書を作成し、AIEQ から受理の通知をすぐに受け取ることができた。キム・チュイさんは、エネルギーで、明るく、親しみやすい話し方をする人らしい。きっと、今年の AJEQ 大会を盛り上げてくれることだろう。いまから楽しみである。

(2016 年度全国大会運営委員長)



<2015 年度小畑賞調査報告 1 >

ケベック滞在点描

伊達 聖伸 (上智大学)

今回「小畑ケベック研究奨励賞」をいただいで、2月後半から3月前半までの20日ほど、ケベックに滞在した。おもな目的は3つあった。第1に、ケベックの間文化主義的なライシテについての研究を進めること。第2に、日本のライシテについての口頭発表。そして第3に、フェルナン・デュモン『記憶の未来』の翻訳原稿を仕上げること。

1点目は、私にとって継続的な課題だが、最も頼りにしているのはケベック大学モントリオール校 (UQAM) のミシュリーヌ・ミロ教授。2011年のUNIFAのときに来日したからご記憶の方もおられよう。彼女との情報交換はいつも有益で、それまでケベックから遠ざかっている、話をしているとその場でアップデートされていく感覚がある。実は今、ケベックにおける間文化主義的なライシテの成立と試練について日本語で論文を書いているのだが、その骨子について説明すると面白いとおっしゃってくださった。遠からずお目にかけることができるのではないかと考えている。

2点目および3点目でお世話になったのは、ケベック大学トロワ＝リヴィエール校 (UQTR) のセルジュ・カンタン教授。2011年からのお付き合いで、フェルナン・デュモンの『記憶の未来』を読んでみるといい、訳してみないかと言われたのも、もうずいぶん前のことだ。小著ゆえカンタン教授の

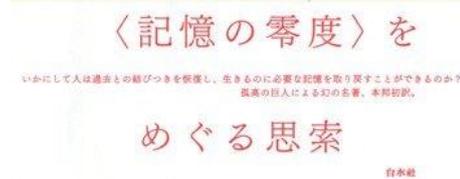
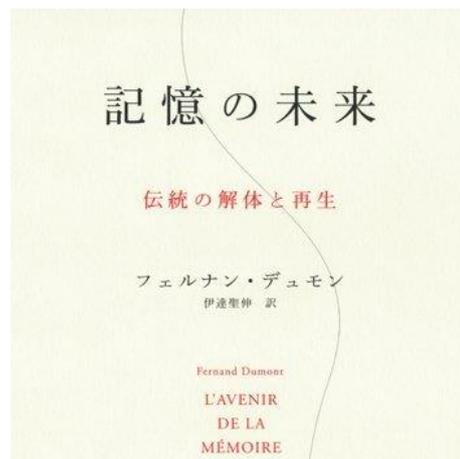
序文と私の訳者解説を前後に配することになり、ちょうど出版社から5月には刊行しましょうと言われていたので、最後の仕上げのために彼のところを訪ねることになっていた。

カンタン教授は UQTR にある CIEQ (Centre interuniversitaire d'études québécoises) にも所属していて、そこには不定期で設けられる研究会 *Conférences-midi* というのがある。折角の機会だから日本の話が聞きたい、ただ講座の性格上ケベックを意識してもらう必要があるとのことで、難題とも思ったが、気軽な会だということで、「間文化主義的なライシテ」という観点からケベックと日本の比較を試みた。日本の間文化主義的なライシテはいわば「逆立ち」しているのではないかというのが基本的な趣旨なのだが、論文などの形にするにはまだまだ先だ。悪天候にもかかわらず研究者や大学院生が20人ほど聴きにきてくれた。写真は講演会のチラシである。

デュモンの訳書の仕上げは楽しい作業となった。ページ稼ぎという用語弊があるが、出版社の担当の方が、あまり厚くない本なので、デュモンの写真などを多く盛り込もうという話になったのである。カンタン教授はこれまでデュモン全集や *Les Cahiers Fernand Dumont* の編集にかかわってきた。多くの写真や資料を日本語版『記憶の未来』に盛り込むことができたのは、ひとえにカンタン教授のおかげである。

訳書は5月末に無事刊行された。「記憶の

糸」を連想させる美しく上品な装丁で、個人的にも気に入っている。内容は目新しくはないかもしれないが、反時代的なアクチュアリティは、原書の刊行当時も今もあると思う。お手に取っていただければ幸いである。



Cette communication a pour but de dégager quelques pistes de réflexion pour comparer la laïcité au Québec et au Japon. La première piste majeure concerne les modalités de la présence de la laïcité dans chaque société. Si, contrairement à la France, la laïcité n'est pas constitutionnelle au Québec, le terme occupe cependant depuis des décennies le devant de la scène dans le débat public. La notion semble bel et bien enracinée dans le mental des Québécois. Au Japon, plus non francophone, le mot «laïcité» n'est pas utilisé en tant que tel, mais on peut retrouver des éléments constitutifs de la laïcité dans la constitution. Adoptée sous l'occupation américaine, cette dernière prône d'ailleurs une séparation stricte des Églises et de l'État, mais sa mise en pratique se révèle souvent assez molle.

La deuxième piste à explorer a trait à l'interculturalisme. Si la laïcité québécoise se démarque de la laïcité française en France, c'est dans la mesure où elle vise à laisser plus de place à la présence des religions dans l'espace public. Certains chercheurs et citoyens tentent ainsi d'assurer la promotion de l'interculturalisme et de le distinguer du multiculturalisme en insistant sur l'importance que le premier accorde au dialogue entre les cultures. Au Japon, la diversité culturelle et religieuse est aujourd'hui un fait, mais la représentation des immigrés dans la société semble, quant à elle, encore problématique. Dès lors qu'on leur préfère le mot «étrangers», on est en effet en droit de se demander si les immigrés sont considérés comme de futurs compatriotes. Leur statut actuel dans la société japonaise n'est-il pas l'indice du sort que celle-ci réserve aux «autres» et du mécanisme de l'inclusion et de l'exclusion qui prévaut?

ENTRÉE LIBRE. BIENVENUE À TOUTES ET À TOUS!
Vous pouvez apporter votre repas

cieq
Centre interuniversitaire
d'études québécoises

VISITEZ NOTRE SITE WEB
www.cieq.ca



＜2015年度小畑賞調査報告2＞ とあるケベック文学の諸相

佐々木 菜緒 (明治大学大学院)

本奨励賞を頂いて、2016年3月モンREALを拠点に3週間の研究調査活動を行った。調査課題は、20世紀ケベック文学の古典形成とケベック人意識の関係について知識を深めること及び、博士論文の参考文献目録を完成させることだった。本報告では同活動中に出会ったケベック文学の諸相についてお伝えしたい。

先ず滞在中、ケベックの文学作品における大テーマ〈長い冬と待ち遠しい春〉の世界をピンポイントで味わった。というのも、モンREAL到着予定の3月1日、カナダ東部では最大級の寒波到来が予報され、そのため該当空港は閉鎖され、私は経由地 NY で足止めを食ったのである。幸いさほどの大寒波でなく翌日無事にモンREAL入りした。20cm 弱の積雪と-15°Cの青空の程よい冬景色であった。その後、時おりの春日和と冬気候の入れ替わりに応じて、人々の表情に春の高揚感と冬の倦怠感が表われた印象的な滞在だった。

次に、3月3日モンREAL大学 CRLICQ にて、19世紀のケベック文芸事情に関する研究会 (Colloque « Les années 1840 : rupture ou réarticulation des possibles ? ») に参加した。同研究会は、愛国党の乱やカナダ自治領結成前後でしばしば問題となる文化的断絶を巡って議論するものである。ここ近年、20世紀半ば以降を中心としたケベック文学

生成論が注目される従来の傾向に対して、19～20世紀初頭フランス系カナダでの活発な文芸活動を見直す動きがある。同研究会への参加は、私の関心「20世紀におけるケベック文学の古典」問題を重層的に考察するための糧となった。さらに、19世紀の雑誌や新聞の出版事情について理解を深めることができ、その理解を現在取り組んでいる共同研究の中で今後活かしていきたい。

また、*La Chasse-galerie* が映画化されていたことについて触れたい。*La Chasse-galerie* とはフランス系カナダ各地で伝承されてきた民話で、大晦日の夜、森で働いている男たちが悪魔と契約し、空飛ぶカヌーで自分たちの妻や恋人の元に戻る。次の日の出までに森に戻らなければならない中、途中で墜落してしまうという物語である。文字で書かれた版では1900年の Honoré Beaugrand の物語が最も有名で馴染みがある。Beaugrand 版では飛行の凄まじさが詳しく描かれているのに対し、Jean-Philippe Duval 監督の映画版は恋愛物語の側面が強い (映画版の題 *Chasse-Galerie: la légende*)。しかし、映画ではケベック文学における「移動と定住」のモチーフがより明確にあらわれている。映画版では、森を駆ける人 (Coureurs des bois) と呼ぶに相応しい男たちは空間を享受し自由を謳歌する。その一方で村や町に定着する男の姿もあり、一人の女性がそうした2種類の男性の間で気持ちがゆれ動く。こうした2つの男性登場人物のあり方はまさに Louis Hémon の *Maria Chapdelaine*



モンリアル市街でみられる私設図書箱 (2016年3月、La Petite-Patrie 地区にて)

をはじめ現代ケベック文学にくり返しあらわれる二重の人物像— «[n]omades et sédentaires»¹—である。映画版 *La Chasse-galerie* はそれを脚色している意味で、ケベックの文学事象の延長線上に位置づけられるだろう。

さいごに、モンリアルの界限にて地元の読書事情に触れた。「Livres-service」或いは «Prendre un livre, laisser un livre», «Little free library」と地区によって異なる名称の箱が住宅街の通りに設置されている(写真)。これまでの滞在経験上、モンリアルに限定して言えば、この箱は、住民間の関係や消費

観、物質主義への姿勢、帰する所 «joie de vivre» を表しているように思う。モンリアルはアパートの階段文化と通りの文化を持つ町である。そこでは住民同士のすれ違う頻度が高く、意見だけでなく物々交換も時おりなされる。そして、他人の生活圏と繋がる空間において自由に読書交換のできるのが同箱なのである。また、モンリアル及びケベックでは *Friprix* や *Renaissance* などの非営利目的の中古市場が盛んである。社会的、経済的、環境的レベルでの高い彼らの問題意識は、住民の自由参加で成り立つ同箱プロジェクトの源泉でもあろう。文化

的娯楽の読書をとおして社会や共同体を支え合う、そのような暮らしの中から生まれるケベック的 «joie de vivre» の一端を一箱から読み取った。

以上のような、現地でしか出会えないケベック文学に触れる機会を与えて下さった日本ケベック学会及び在ケベック州政府事務所に感謝し御礼申し上げます。



家族とともに (1989年12月)

注

1 Gauvin, L., (2011) «Aventuriers et sédentaires : de quelques mythes revisités», *Revue japonaise des études québécoises*, 3: 21.

＜リレー連載「ケベックと私」第2回＞

あの日にかえりたい (Je reviendrai à Montréal …)

加藤 普 (元東京銀行)

1. モンリアル赴任

私は銀行員としてディジョン、パリ、モンリアル (モントリオール)、サイゴン、テヘランに駐在した他、五大陸の主要都市、そして後年担当した中近東・アフリカ諸国、とりわけトルコ、マグレブ (アルジェ等)、レヴァント (ダマスカス・バイルート・イエルザレム等) 境界で仕事をしました。モンリアルでは4年間 (1989年6月～93年4月) 支店長をしましたが、ドゥ・ラ・ゴッシュティエール通り西600番地の27階にオフィスがありました。私は30代後半で血気

盛ん、7歳、5歳、3歳、1歳の4人の子供を帯同し、ガスぺからナイアガラへ、南は米国を駆け抜けてフロリダへと、家族一緒に車で走り回りました。

2. 子供の教育言語

住まいはウェストマウント市ランズドーン通り200番地、丘の上にシーグラム (ブロンフマン家) 豪邸や日本総領事邸、商社支店長邸などが軒を並べていました。古き良きアングロ・カナダを体現するウェストマウントには、子供に英語教育を受けさせたい一心の日本企業駐在員や留学医師が家を求めましたが、漸くロズリンのような英系公立校に入学が認められても、州文部省指導「フレンチ・イマージョン」の教室で、子供たちは英仏混在の言語環境適応に四苦八苦することになります。そこでフランス語の教科書・通信簿に耐えられない親や英国・英語教育に憧れる親は、セルウィンハウスのような私立バリバリの英国伝統校への転校選択を余儀なくされました (教育言語問題に苦しんだ駐在員たちの当時の思いは、

簡単に言い尽くすことができません)。

3. 補習校校長

商工会が運営する日本語補習校の校長に任命されたことも、今では楽しい思い出です。小1から中3まで約90名、それまで「君が代」斉唱一辺倒だった式典を、地元への感謝を示そうと一緒に「オー・カナダ」を英仏交互に歌ってもらうようにしました。父兄の一人で、モンREAL大学客員研究員をされていた故小畑精和先生には、このとき初めてお会いしました。

4. 経済の衰退

絶頂期が1967年の万博、最後の線香花火が76年のオリンピックと言われ、既に私の駐在時、モンREALのプレゼンスが大きく低下していました。何もこれは(独立運動による基幹産業逃避など)ケベック州側のせいだけではありません。70年代頃から米加双方の地域同士の国境を跨ぐ結びつきが強まり、モンREALに本社をおく大陸横断鉄道のCNやCP(1996年にカルガリーに移転)が象徴する「東西に細長いカナダ経済圏」の意味が薄まったことや、宗主国のEC加盟で英国経済の枠から外れて「女王陛下のカナダ連邦」の一体感が失われたことは、モンREAL経済には大きな打撃でした。モンREAL本社のトップ企業シーグラムやドミニオン・テキスタイルはこのころ資産の過半を米国に有し、アルキャンも米ドルで決算発表を行う始末です。一方、バンクーバーは香港移民急増で広東語都市と化し、トロント空港に降り立てばパンジャブ空港

かと思ふ程にシーク風ターバン姿の運転手が溢れると云った風に、かつては中規模にすぎなかった西方の都市が急速に発展を遂げていました。

5. 二言語連邦体制の危機

強烈なリーダーだったピエール・E・トゥリュドー(モンREAL出身)が試みた「楓の新国旗の下に英仏二言語で強力な連邦国家の構築」(1982年カナダ憲法制定)も、お膝元のケベック州ルネ・レヴェック政権の批准拒否で結実せず、一方で連邦の柱「フランス語」がケベックとアカディアの一部を除けば全くの少数言語に転ずる状況で、カナダを束ねるアイデンティティが希薄になっていました。そんな中、トゥリュドーの夢を、ミーチレーク合意(1987年)の改憲案(曖昧な「特別な社会 *société distincte*」条項でケベック州の顔を立てた)で実現しようと、ブライアン・マルルーニ(バー・コモ出身)の進歩保守党連邦政権とロベール・ブラサの州自由党政権が手を組みます。各州の改憲案批准期限は90年6月でした。

6. 英系カナダから売られたケンカ

批准期限を前に開催されたオタワでの全州首相による徹夜会議のテレビ中継では、マルルーニの名優ともいえるパフォーマンスが奏功し、改憲案が成立したかと何度か錯覚しましたが、土壇場でマニトバ州(ネイティブ・アメリカンこそ憲法で特別な社会と認められるべきと主張)とニューファンドランド州(1949年連邦加盟の新州)が反対して合意不成立になってしまいました。

面目を潰されたのがロベール・ブラサです。独立を標榜するジャック・パリゾー（ケベック党）を押さえ込み、漸く辿り着いた連邦憲法参加の門は、いま英系カナダの拒否で一瞬にして閉ざされてしまいました。売られたケンカは、買わねばならぬ——、これが当時モンリアル市民多数の偽らざる気持ちだったように記憶します。

7. 思い出

不動産不況やNAFTA (92年調印) による企業のメキシコ流出などビジネスの苦戦がありました。ケベック州政府向け協調融資で副代表幹事に就任したとき、ケベック市の州大蔵省の夕食会では、ジェラルド・ルヴェック蔵相の

La Presse, Montréal, le 6 mai 1993

C3



Imaginez qu'il vous est déjà arrivé de vous deman- der, comme tout le monde, jusqu'à quel point les petits riens, les choses anodines, les détails sans importance apparente, renferment souvent les plus grands enseignements.

Bon. Excusez les allures philosophiques de ce préambule : c'est pas mon fort, comme vous venez de le voir, mais c'est ce que j'ai trouvé de mieux pour présenter cette chronique.

S'il est une chose dont on n'arrête pas de parler, par les temps qui courent, c'est du retard accumulé par le Canada face à ses compétiteurs, dans tous les domaines. Voici une anecdote qui vaut la peine d'être racontée, parce qu'elle illustre, à partir d'un petit détail, comment nous nous faisons distancer par des compétiteurs beaucoup plus subtils que nous.

Jusqu'à tout récemment, Hiroshi Kato était vice-président et directeur général de la Banque de Tokyo du Canada; à ce titre, il était notamment patron du bureau montréalais de la banque.

M. Kato vient de recevoir une promotion qui l'amène à travailler au siège social de la banque, à Tokyo. La Banque de Tokyo, avec un actif qui dépasse les 250 milliards US, n'est pas précisément le premier joueur venu dans le monde de la finance internationale. Réunissez la Banque Royale, la Banque de Montréal, le Mouvement Desjardins, la Caisse de dépôt, la Banque Laurentienne, et vous aurez une idée de la taille de la Banque de Tokyo. Banque qui, question de mettre les choses en perspective, est d'ailleurs loin d'être la plus importante au Japon: la Banque Fuji, la Banque Sanwa, la Banque Mitsubishi, entre autres, s'ajoutent sur plus de 400 milliards US chacune; quand on parle de la puissance financière japonaise...

Toujours est-il qu'avant de quitter Montréal, le banquier japonais a pris la peine d'adresser une lettre aux différents personnes avec qui il a eu des liens professionnels. A titre de journaliste en économie, mon collègue Miville Tremblay, qui l'a rencontré et appelé à quelques reprises, fait justement partie des destinataires.

Pas très longue, la lettre en question, mais éloquent!

M. Kato annonce son départ, précise où il s'en va, présente son successeur en fournissant tous les détails pertinents, donne ses nouvelles coordonnées à Tokyo (au bureau et à la maison). Il ajoute les noms de quelques dirigeants de la Banque de Tokyo au Canada, qui peuvent être contactés au besoin.

Voilà pour le côté pratique. Tout y est, et c'est déjà beaucoup.

Mais l'histoire ne finit pas là. Le banquier japonais (qui, soit dit en passant, a appris le français en s'installant à Montréal, initiative qui pourrait avantageusement inspirer beaucoup d'hommes d'affaires anglophones) profite de l'occasion pour remercier le lecteur pour l'accueil qu'il a reçu au Québec. Et termine en citant Robert Charlebois: «Je reviendrai à Montréal dans un grand Boeing bleu de mer; j'ai besoin de revoir l'hiver et ses aurores boréales...»

Le tout, évidemment, dans un français impeccable; pas une, pas une seule faute d'orthographe, ce qui démontre un respect que beaucoup de Québécois de souche n'ont même pas pour leur propre langue, quand ils parviennent à la parler à peu près correctement.

Cette lettre fait réfléchir.

Nous sommes tellement habitués à recevoir, en de semblables circonstances, un banal carton imprimé et dépersonnalisé, annonçant poliment que Monsieur X est maintenant directeur du département Y, et qu'on peut le rejoindre au 000-0000 (Fax 111-111). Point à la ligne.

Et ça, c'est quand on reçoit quelque chose.

La lettre de M. Kato est certes reproduite à des dizaines d'exemplaires. Mais le signataire, dans le cas de mon collègue Miville Tremblay en tout cas, a ajouté de sa main une petite ligne indiquant clairement qu'il se souvient bien du destinataire.

Selon Miville, le français parlé de M. Kato demeure laborieux. Probablement a-t-il fait corriger sa lettre avant de l'expédier. Mais, au moins, il a pris la peine de s'assurer qu'elle serait écrite sans bavure. Cela s'appelle du respect.

Voilà un banquier japonais qui poursuit son ascension au siège social d'une des plus grandes banques du monde, et qui, au fond, aurait sans doute assez bien pu s'effacer en douce. Mais il prend la peine de laisser ses coordonnées à la maison, de préparer le terrain pour son remplaçant, et de laisser un mot d'adieu qui démontre une sensibilité surprenante à la réalité québécoise: «Soyez assuré que je garderai un très beau souvenir du Québec grâce à plusieurs livres, cassettes de musique, films québécois et photos de voyage», confie-t-il dans sa lettre.

«Il va de soi», réagit Miville, «qu'une lettre comme celle-là ne peut faire autrement que de laisser une impression favorable; je n'aurai certainement aucune hésitation à contacter son successeur». Sentiment, peut-on présumer sans risque d'erreur, qui sera partagé par les dizaines de clients, fournisseurs, employés, professionnels, journalistes, et autres personnes qui ont reçu la même lettre. Inutile d'ajouter que cette impression favorable jaillit sur la banque.

Superbe!!!

Réflexion faite, non, ce n'est pas superbe... de notre point de vue à nous. C'est terrifiant! Ciel, que nous sommes en retard!

Et tout cela n'aura sans doute pris qu'une heure ou deux de travail. Mais quel investissement! Et quelle leçon...

1993年5月6日付 La Presse の記事

隣で、居並ぶ参加銀行団を見下ろす雛壇の上に座りました。イスラエルのシモン・ペレス外相（当時）を招いてエドガー・ブロンフマン・シーグラム会長（世界ユダヤ人会議代表）が開いたパーティーに初めてブラック・タイ装束で出席したときは、和服の妻を同伴した唯一の東洋人カップルということで随分目立ちました。93年モンリアル離任の際、地元紙「ラ・プレス」クロード・ピシェ論説委員に「サヨナラ、ムッシュ・カトー」という記事を書いてもらい感激しました。以来四半世紀、次女だけが戻ってマギル大学を卒業しましたが、私は一度も戻っていません。

●編集後記●

先日、英語圏で長年ケベック（史）研究を主導した Ramsay Cook 先生の訃報に接しました。先生は日本のカナダ研究の発展にも尽力くださいました。ご冥福をお祈りします。(T)

日本ケベック学会 (2016年7月現在)

●主要役員

- 小倉和子 (会長)
- 立花英裕 (副会長)
- 小松祐子 (副会長)
- 伊達聖伸 (副会長)

●広報委員

- 宮尾尊弘
- 小松祐子
- 山出裕子
- 大石太郎

C・ドゥロンジエ

S・コルベイユ

(顧問、ケベック州
政府在日事務所代表)

AJEQ ニュースレター 年 3 回発行

発行人：小倉和子 編集人：大石太郎